≪資料報告≫

草刈遺跡の鉄器二題

白　井　久美子

1．はじめに

市原市草刈遺跡は、1979年から継続して発掘調査が行われてきた。台地に広がる30万平方mという規模の遺跡に、旧石器時代から平安時代にわたる人々の歴史が所狭しとひしめいて、次々に姿を現わしている。発掘された遺構や遺物には、画期的なものが少なくなく、速報として当誌上などに紹介・報告された資料も多い。ここでは、弥生時代後期と古墳時代中期の鉄器のなかで特に多くの方々から問い合わせのあった2点を報告し、研究の一助となることを望みたい。

2．鹿角装柄付の鉄剣（図1－1）

この剣は、1989年に草刈遺跡H区から出土したものである。草刈遺跡H区では弥生時代後期の集落内に4基の木棺土坑墓が検出され、そのうちの211号からコバルトブルーのガラス玉25点と共にこの鹿角装柄付の鉄剣が出土した。

また、他の2基からは断面板状の青銅製腕輪がコバルトブルーのガラス玉を伴って出土している。ガラス玉はいずれも形が不揃いで、押圧によって整形した痕が見られる。径4.5㎜から7.5㎜の比較的大きいガラス玉であることも共通している。断面板状の青銅製腕輪は、1例が6連もう1例は破片であった。この種の腕輪は弥生時代後期の方形周溝墓からも出土しており、4連・5連と重ねて装着した例がみられるのが特徴である。以上のような状況から、この剣が弥生時代後期の土坑墓に伴うものであると判断した。

剣は切先を欠くほかは剣身部が残存し、現状の全長は22.0cm、剣身部長21.4cmで、短剣に分類される。最も特徴的な点は茎部の形態にあり、明確な関がないまま刃部から茎に移行している。

鹿角の柄は小口を斜めに切って装着され、目釘孔も小口の切り口に合わせて配置されている。このような小口の切り方は、鹿角製の刀子柄部にみられる。柄は弧を描いて割れており、彫刻文部分で割れを生じたものと思われる。小口の切り口は丁寧に面取りされ、表裏に段差が見られる。目釘は木質である。剣身には布片が付着し、少なくとも二重に布が巻かれていたようである。また、柄の付近には皮状の薄い皮膜が認められる。剣身の幅は中央部で2.50cm、柄部付近で2.85cm、厚みはそれぞれ4.4㎜、5.5㎜である。現状での重さは、103.7gあり、大きさの割に重量感がある。

3．鋸（図1－2）

片側に木製の柄を付けた両刃の鋸である。この鋸は、草刈遺跡の西南部に位置する草刈1号墳から出土した鉄製農工具のなかの一つである。草刈1号墳は墳丘径38mの円墳で、3基の木棺直葬の埋葬施設から鉄製武器・鉄製農工具・鉄鋌・滑石製小玉などのほか青銅製腕輪（断面菱形）・メノウ丸玉・碧玉製管玉・ガラス玉など、中期前半の古墳に特徴的な副葬品が出土している。鋸は第2施設の東小口に剣・鉄鏃・鎌・斧と共に副葬されていた。中央部には剣・鉾・蕨手刀子などと玉類、西小口には剣が置かれていた。

鋸は、歯の切り込みが極めて浅く、X線フィルムの観察によっても切り込みの不明瞭な部分がある。欠損部も含めて柄木側の切り込みは52、刃部側の切り込みは57～58と推定される。両刃とも使用によってすり減った可能性が高く、柄木側の刃を既に使った後、柄を付け替えて使用していたものとみられる。柄木は片側で厚さ4㎜ほどに遺存し、両端の目釘によって固定されていたと考えられる。

全長23.0cm、刃部長18.9cm、刃部中央幅3.0cm、端部幅1.5cmである。現状での刃部の厚さが1.0㎜～1.7㎜という薄い造りで、重量は59.9gである。

歯には歯振（あせり）や切歯（なげし）が認められず、残りがかなり悪いため、木材以外の素材や製品を折断するのに用いられていた可能性が高い。

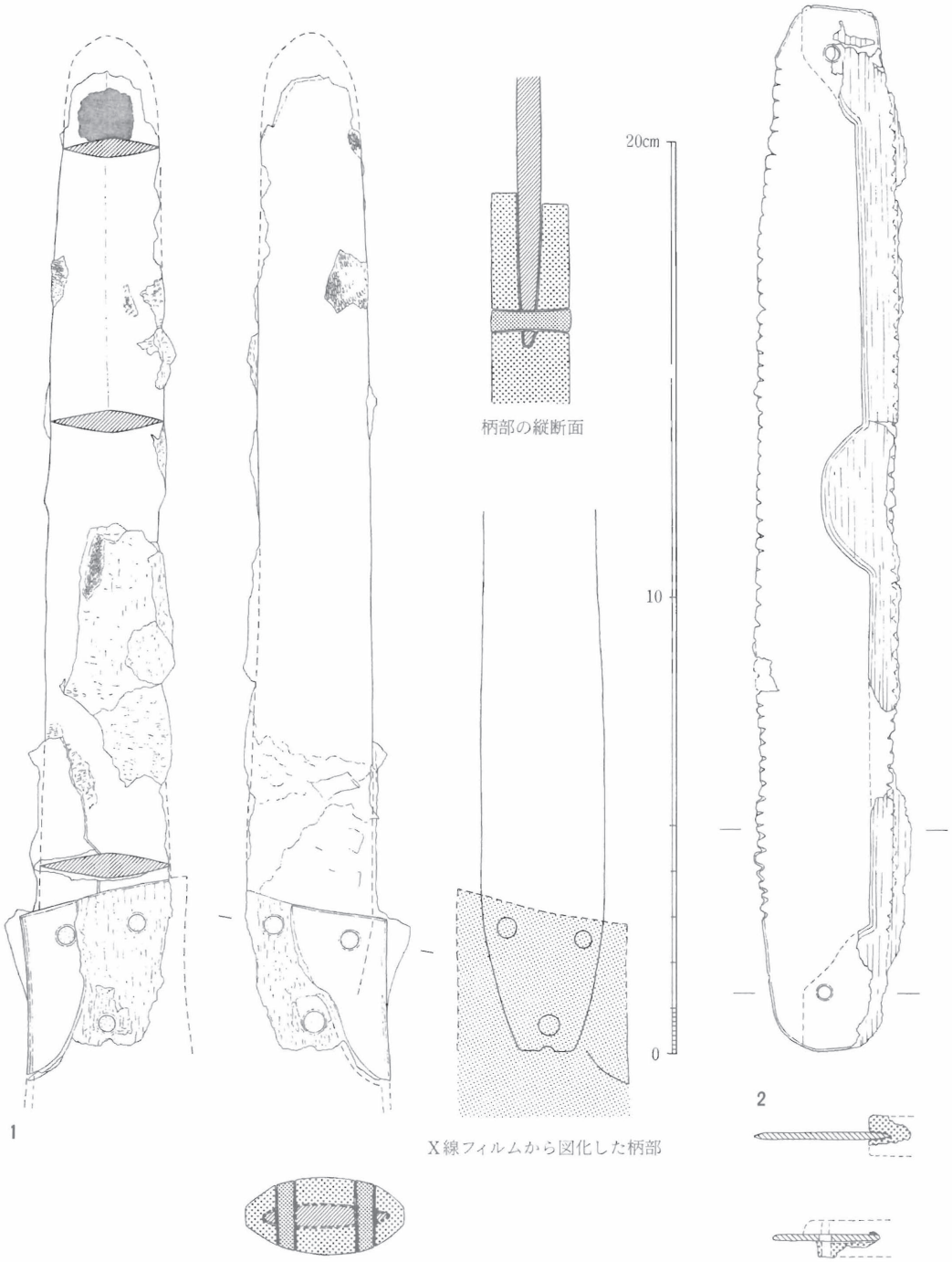

図1　草刈遺跡H区出土の鹿角装柄付剣と草刈1号墳出土の鋸